



▲神戸市産業歴史展（市中小企業会館は、センター街のセンタープラザ15階にあり）

神戸市の産業歴史展だより

（神戸市立中小企業会館内）

産業歴史展を開催するにあたって港から神戸は生れました。わずか一〇年前、街道わきの寒村だった神戸、夫れが今、一三〇万人の大都市になっています。人間の途方もなく大きなエネルギーの所産といえるでしょう。明治という近代の幕あけに、神戸は開かれました。古代からの港町、兵庫の根強い伝統と、新開港場に集まった内外人との融合と反発のなかで、ハイカラ神戸が築かれました。それを「舶来の文化」だとする考えがあります。しかし、海外から、もたらされた情報と文化を適確に吸収し、新しいものをつくり上げたのは、まぎれもなく神戸に住む人達です。製茶に始まる貿易は、マッチ、ゴム、ケミカルシューズと、日本の中心に位置する産業を生みつぎ、洋服、洋装、洋家具、洋菓子……の身近かな衣食住関連から、造船機械、鉄鋼まで、産業の歩みはそのまま市民生活の成長、発展に結びつきます。何故なら、それらは市民全部によってつくられて育てられたのだからといえるでしょう。

私たちの神戸がいつ、何を生み、何を伸ばしたか、あすの神戸を考えるためにも、いま一度歩みを見直して、自信と展望を確かなものにし度

いと幸いです。このささやかな展示を通して、産業が文化を高め、高い文化が産業を生み出すことを、くみとっていただければ幸いです。

会期・昭和五十三年三月まで一ヶ月にわたって開催します。平日午前十時から五時まで、日曜日祭日は休み土曜日午前中 入場無料 開期中展示物陳列替を行う

◆鈴木商店関係出品目録

鈴木商店のれん、鈴木商店はつぴ金子直吉、柳田富士松肖像（小磯良平画伯）、鈴木商店炎上写真、鈴木商店運動会の旗、船鉄交換記念時計、天下三分の計（金子直吉の手紙）鈴木よね、金子直吉、柳田富士松愛用の硯、金子愛用の楠の化石

鈴木商店関係諸文献

鈴木商店伝統の風韻を偲びて有感
散りてまで のこれる花の かほり可奈

鈴木商店先達諸賢の足跡に人生訓を求めつつ
いたづらに 欠つるならびを いつまでも
聞えて残る 名こそかひあれ

謹詠 原田 筑水

辰巳会全国大会に寄せて

（昭和五十七年五月十日）

（15）

私は大正7年4月、一橋を卒業して25歳で鈴木商店に入り、大正14年末32歳で帝人に移るまで7年半鈴木に勤めた。

この期間は実社会に出たばかりの感受性の強い時期だけに、鈴木商店の自由奔放で偉大な経営と、わが国の実業界に不滅の足跡を残した金子直吉翁の卓越した指導力は、その後の私のものの考え方や人間形成に決定的影響を与えた。

私が就職先として鈴木を選んだのは、商売人になる以上、商都で

った。

すると、金子さんに呼ばれ、「帝人は岩国に近代的な大工場を建設する。前途有望だからぜひに……」とくどかれた。金子さんが私のような青年社員に直接勧誘するなどというのはなかったことで、そこまで買ってくれるならと感激し、承諾したわけだ。

こうして私の一生の事業となった人造繊維工業への第一歩を踏み出したのだが、正直いって友人はみな海外で活躍しているのに、岩

海外断念、塞翁が馬



私と鈴木商店

帝人社長 大屋 晋三

ある大阪、神戸で商人魂をたたき込まれた方がよいと思ったからだ。鈴木は新興企業の中でも当時日の出の勢いで伸びており、型にはまった大会社と違って、自由に活躍できると感じていた。

鈴木で私が希望したのは、事業の主体である貿易で海外へ雄飛することだった。その私に帝人行きの話が持ち込まれたのは、本社段階で決定していたロンドン行きの話が、ある人の中傷でダメになり、意気消沈している時で、私は帝人へ行くことは気が進まず一度は断

国などという片田舎へ行くと思うと、都落ちのような気がして実に寂しかった。

しかし、その後、鈴木は破たん、私がうらやんだ海外駐在の先輩、同僚は失職の憂き目を見た。何が幸いするか全くわからぬものである。

いま振り返ってみて、私が鈴木以外に職を求めていたら、現在のよう人間になれなかったわけで、「われ鈴木に勤めて、一切の悔いなし」の心境である。

日本経済新聞（夕刊）昭和52年5月25日付〈関西けいざい春秋風雪〉



重職責
（田宮嘉右衛門氏）

女房の式目（分限の礎）

鈴木よね刀自座右の銘

- 一、第一家内を見まつへ 費なきや
- 一、物嫉み 中言 告口を慎み 我が身をかへり見 物事意地悪く 人に当るまじき事
- 一、下女 丁稚は使ひものと侮りつ
- 一、わが器量を鼻にかけ 委をさら れたりとも又た外へ嫁くべしと 不埒の所存つ、しむべきこと
- 一、夫の家ははじめ貧にして 後栄えたりとも高き顔無用のこと
- 一、夫の家はじめ宜敷しく 後零落したりとも 夫を侮るまじきこと
- 一、夫の身体不相応の衣裳 ならびに自分不相応の 櫛 笄 簪 髪ざし まじきこと
- 一、わが器量を鼻にかけ 委をさら れたりとも又た外へ嫁くべしと 不埒の所存つ、しむべきこと
- 一、夫の家ははじめ貧にして 後栄えたりとも高き顔無用のこと
- 一、夫の家はじめ宜敷しく 後零落したりとも 夫を侮るまじきこと
- 一、夫の身体不相応の衣裳 ならびに自分不相応の 櫛 笄 簪 髪ざし まじきこと
- 一、わが器量を鼻にかけ 委をさら れたりとも又た外へ嫁くべしと 不埒の所存つ、しむべきこと
- 一、夫の家ははじめ貧にして 後栄えたりとも高き顔無用のこと
- 一、夫の家はじめ宜敷しく 後零落したりとも 夫を侮るまじきこと
- 一、夫の身体不相応の衣裳 ならびに自分不相応の 櫛 笄 簪 髪ざし まじきこと

（編）